

さくらほっと NEWS

vol.63 令和6年夏号

名古屋市立大学病院 さくらほっとNEWS vol.63 令和6年夏号

発行：名古屋市立大学病院 発行責任者：院外広報課編集会議（年4回発行）
〒467-8602 愛知県名古屋市瑞穂区瑞穂町字川澄1 TEL 052-858-7116（経営課）

令和6年10月1日以降分べん介助料が改定されます

令和6年10月1日以降の出産から、分べん介助料が以下の通り改定されます。ご理解のほど、お願いいたします。

項目	令和6年9月30日まで	令和6年10月1日から
分べん介助料(時間内)	¥120,000	¥200,000
分べん介助料(時間外)	¥140,000	¥220,000
分べん介助料(深夜)	¥160,000	¥240,000
分べん介助料(休日)	¥160,000	¥240,000
1児超える時は1児増すごとに	¥60,000	¥100,000

※時間外は、午後5時から翌日午前8時30分まで。ただし、午後10時から翌日午前6時までは深夜。
※休日は、土日・祝日及び12月29日～1月3日。

桜花学園高等学校ハンドベル部ミニコンサートを開催しました

令和6年3月22日に桜花学園高等学校ハンドベル部「Cherry Bell Ringers」による、患者さん、ご来院の方及び医療従事者のための院内ミニコンサートが開催されました。コンサートでは、一般的な奏法の「リング」や、マットに叩きつけて短い音を鳴らす「マルテラート」、ベルをばちで叩く「マレット」など様々な奏法が用いられており、曲だけでなく音も楽しめるような演奏を披露いただきました。また、当日は小さなお子さんからご年配の方まで幅広い年齢層のお客さんが会場を訪れましたが、「ディズニーソング」や「赤いスイートピー」など、どの年代の方も楽しめるような曲目となっております。最後には、ハンドベル部の卒業生が作曲した曲が演奏され、大盛況のうちに閉幕となりました。



さくら基金へのご寄付ありがとうございます

名古屋市立大学病院では、「笑顔と感動」への架け橋として役立てることを目的として「さくら基金」を設置しております。寄せられた寄附金は、医療の充実を図るために活用しております。令和5年度は、化学療法室増床のための整備や、産後祝い膳用の食器購入、初期研修医のスクラブ購入等に、基金を活用させていただきました。皆様のご理解・ご協力に厚く感謝申し上げます。



さくら基金についてのお問い合わせ先

経営課経営係さくら基金担当

TEL: 052-858-7529(直通)

受付時間：月曜日から金曜日の午前9時から午後5時

名市大のメラノーマセンターをご紹介します

名市大病院のチカラ Vol.31

- 令和6年10月1日以降分べん介助料が改定されます … 4
- 桜花学園高等学校ハンドベル部ミニコンサートを開催しました … 4
- さくら基金へのご寄付ありがとうございます … 4

当院では電話の自動音声案内を導入しております

令和6年3月9日(土)午後5時より、当院へお問い合わせくださる方への円滑な対応を目的として、代表電話(052-851-5511)について、電話音声案内を導入しております。

音声による案内が流れますので、お問い合わせの内容に応じた番号を選んでください。音声案内の途中でも番号を選択いただけます。

名市大のメラノーマセンターをご紹介します

メラノーマ(悪性黒色腫)という名称に聞き覚えのある方は少ないかもしれませんが、「ほくろの細胞から発生するがん」という概念自体はご存じの方も多いかも知れません。メラノーマは年間10万人中1名程度の発症率であり、名古屋市の人口が約230万人ですので年間23名程度の発症と、人数は少なく、希少ながんの一つです。ただし、予後は非常に悪く、進行も早いことから早期発見、早期治療を行うことが最も重要です。この疾患で大きな問題点の一つとして挙げられるのが、メラノーマを適切に診断できる医師が少ないことです。皮膚科学会では、皮膚悪性腫瘍指導専門医というメラノーマをはじめとした皮膚がんの診療に特化した医師のためのライセンス制度を有しておりますが、愛知県の勤務医師でこの資格を有しているのは3名のみです。その3名のうち2名が名古屋市立大学病院に属していることもあり、我々の施設には、各所よりメラノーマ患者さんを多く紹介いただいております。2022年度データでメラノーマ患者さんの症例数(手術数)で日本一となることができました(病院情報局DPC全国統計による)。

しかしながら、メラノーマ診療は年々複雑化しており、診断や手術のみでなく、陽子線治療、化学療法(分子標的治療や免疫療法など)、及びそれらと手術療法の組み合わせなど、複数の専門知識が必要になってきており、単診療科のみでの診療が困難になりつつあるのが現状です。そのため名古屋市立大学病院では、複数の専門家による円滑な診療を目指してメラノーマに特化した診療を行うため、メラノーマセンターを設立いたしました。メラノーマセンターでは事前に情報をいただくことで、皮膚科のみではなく、腫瘍内科、放射線科(診断、治療)、病理診断部、形成外科、看護師などの複数の専門家で情報共有を行い、メラノーマ患者さんに最短での診断、最良の治療方法などをご提案することが可能です。初診診療のみでなく、セカンドオピニオンにも対応し、既に多くの患者さんに受診いただいております。メラノーマを疑う様な症例や診療方針に困った場合などはお気軽にご相談いただければ幸いです。

メラノーマ患者さんに適切な医療を迅速に提供

メラノーマに特化した各専門分野のエキスパートが迅速に対応します

受診当日に最短で検査、治療などの予定を確保します

初診時からフォローまで皮膚悪性腫瘍指導専門医が一貫して診察します



メラノーマセンター機能イメージ

名市大病院のチカラ Vol.31

令和6年能登半島地震への医療支援について

2024年1月1日に発生した能登半島地震に対して、災害派遣医療チーム(DMAT※)及び災害派遣精神医療チーム(DPAT※)を派遣しました。被災地の病院支援や、被災者と支援者の双方に対する精神的支援などに従事しました。また、災害支援ナースと臨床検査技師も派遣し、避難所で感染症の被災者の支援や深部静脈血栓症(DVT)検診業務に従事しました。さらに、石川県から広域医療搬送された高齢者施設入所者の受け入れなども行いました。被災された方々に心からお見舞い申し上げますとともに、今後も医療支援に貢献してまいります。



名市大DMAT1次隊



名市大DMAT2次隊



名市大DPAT先遣隊

※DMATとは、「Disaster Medical Assistance Team」の略で、災害の発生直後の急性期から活動ができる機動性を持った、専門的研修・訓練を受けた医療チーム。被災地域に入り、急性期の医療体制の確立、緊急治療や病院支援などを行う。

※DPATとは、「Disaster Psychiatric Assistance Team」の略で、災害時の精神保健医療ニーズに対応することを目的とした専門的な研修・訓練を受けたチーム。被災地域に入り、専門性の高い精神科医療の提供と精神保健活動の支援などを行う。

DMAT(災害派遣医療チーム)の派遣	期間	メンバー
第1次	1月3日 ~ 1月7日	医師2名(世野・高須)、看護師2名(清水・平原)、業務調整員1名(早川)、計5名
第2次	1月7日 ~ 1月13日	医師2名(山岸・坪内)、看護師2名(寺西・樺山)、業務調整員2名(南里・加藤)、計6名
第3次	1月24日 ~ 1月28日	医師1名(山岸)、看護師1名(平原)、業務調整員1名(南里)、計3名
第4次	2月13日 ~ 2月16日	医師1名(山岸)
DPAT(災害派遣精神医療チーム)の派遣	1月5日 ~ 1月8日	精神科医1名(久保田)、看護師1名(川崎)、精神保健福祉士1名(堀川)、計3名
災害支援ナースの派遣	1月30日 ~ 2月2日	助産師2名(井上・柴田)
臨床検査技師の派遣	2月3日 ~ 2月5日	臨床検査技師1名(三田)
DMATによる搬送患者の受け入れ	【受入日】1月11日、1月23日	【受入人数】3名、1名

消化器・一般外科

ベトナム国立がんセンター(K病院)にて高難度ロボット手術を披露 —ロボット手術技術に関する施設間連携協定締結—

消化器外科は、JAPAN-VIETNAM Robotic Laparoscopy Surgery Week (RLSW) (2024年2月18日~23日)として、ベトナム国立がんセンター(K病院)を訪問し、ベトナム国民が注目する中、1週間で胃がん・肝臓がん・食道がん・直腸がん(2件)のロボット手術5件を施行してきました。

K病院は、ベトナムにおける主要ながん治療施設として重要な拠点病院のひとつです。高度な医療技術とその専門知識を活かして、多くの患者さんに質の高いがん治療を提供しています。ただ、ベトナムでは手術支援ロボットを導入したばかりです。今回、当院が有するロボット手術の深い知識と高い技術を消化器外科領域において提供しました。結果、将来にわたってベトナムの医療技術、特に腫瘍学のロボット手術の進歩に貢献し、医療水準の向上に結び付ける上で大きな一歩となりました。さらに名古屋市立大学病院とK病

院の間で連携協定を締結してきています。

JAPAN-VIETNAM RLSWの様子は、ネットニュースのみならずベトナム国営放送で大々的に報じられました。K病院で施行した手術や施設間連携協定調印式の模様、瀧口修司教授のインタビューが放映され、これまでのK病院との交流に加え、施設間連携協定を結ぶに至った経緯、今後の展望について伝えられ、大きな評価を受けています。



ベトナム国営放送のインタビューを受ける瀧口教授